ロラの変化に富んでいる長野県で本書が刊行されたことは，現在進行中の他地域の活動のはげみになるだろう．入手については上記研究所，381–0075 長野市北郷 2054–120 Tel. 026–239–1031へ問い合わせられたい．

（金井弘夫）

□McManus M. T. and Veit B. E. (eds.): **Meristematic Tissues in Plant Growth and Development** 301 pp. 2002. Scheffield Academic Press. £89.

植物の分裂組織についての最近の成果を展望したもので，次の9章が分担者18名によって記されている．各章の見出しは次の通り．1. 分裂組織の形成と機能，2. 栄養器官における分裂組織，3. 高等植物胚発生における頂端分裂組織の形成，4. 生殖器官における分裂組織の遺伝的制御，5. 腋性分裂組織の形成，6. 高等植物の葉序，7. 葉形形成と分裂組織，8. 植物細胞分裂の制御，9. 根の分裂組織．

分類学をやる者にとって，植物の形は最も大事な認識対象だが，それがどのように作られてゆくのか，そこにどんな法則性があるのか，出来上がった植物体を見るだけではどうもよくわからない．同じ種の葉形でも，比較的一定のものもあれば，とんでもなく変異していて，別な種類と見誤るようなものもある．そういう現象の法則性を把握するために，形態学というものは基本的だと思うのだが，少なくとも日本ではこの分野の研究には日が当たりにくい．本書では総計約1000件の文献（その中で日本人の報文は重複を含むが約75件）が挙げられている．多くはいわゆる生理・生化学な観点からの形態形成の問題を扱うもので，我々が目にする「形」との接点はまだ遠い感じがするが，本書によってこの研究分野の世界的な情勢を一望することができるのは，歓迎される．

（金井弘夫）

□大場秀章：**花の男シーボルト** 198 pp. 2001. ¥690. 文芸春秋社.

日本植物研究におけるシーボルトの業績については，すでに語り尽くされているように思われるが，著者は更に別の方向から光を当ててみせる．まずドイツ人であるシーボルトが，オランダ人として日本にやってきたことについて，当時の植民地争奪戦を背景とする欧州情勢，これにからめたシーボルトの生い立ちと性格の描写が，多くの資料を引用しながら，オランダが特別の思い入れの下に，彼に単なる医師としてではなく，日本についての特定研究とも言える任務を与えて派遣したことが語られる．シーボルトの日本における活動はその任務に応えるためのもので，オランダ商館が作り上げた人脈を活用して，ツュンベリーやケンペルにまさる広範な成果を収めたことが，あらためて強調されている．そしてこれ迄あまり認識されていない貢献として，日本産生植物の導入によって欧州の園芸界に大きな変革をもたらし，現在の隆盛に導く一つのきっかけを作ったことが述べられている．シーボルトの没後，その将来品はイギリス，オランダ，ロシアなどに分散されたが，最近それらの再評価にかかわった著者が，あらためてシーボルトの別な見方を提示したものである．大学博物館の職にあり，また音楽の素養のある著者が，いわゆる「枚挙生物学」に対する周囲の無理解をチクリとやったり，彼の作曲の腕前を評したりしているのも，見逃さない方がよい．

（金井弘夫）

□大場秀章：**道端植物園** 240 pp. 2002. ¥760. 平凡社.

いわゆる路傍雑草についての随筆集である．こういう本はいくらもある．簡単な記相にはじまって近似植物の見分け方，名前の由来，古典の引用，民俗的利用…と，書いてある項目だけならべれば月並みメニューなのだが，読み進めて行くと類書とはなんだか違っているという気がしてくる．古い文献をよくこなしていることと，帰化植物が多いので外国の文献にも目を配っているのが，その理由だろう．これに加えて著者自身の経験や最近の研究成果もあちこちに取り込まれている．植物観察会の指導者に，新しい台本が提供されたと言ってよかろう．

（金井弘夫）